キリスト教学研究室紀要 研究ノート

毀損された男性性
―エステル記第一章におけるアハシュエロスをめぐる記述に注目して―

キリスト教学専修修士課程 1 回生　藤守 麗

はじめに

本論考の目的は、男性学の知見を適用することで、新たな聖書解釈の可能性を探求することにある。そこで、エステル記の中でもとりわけ第一章に見られる、アハシュエロスに関する記述を男性学の観点から分析する。本論考の結論を先立って述べるならば、次のようになる。アハシュエロスというキャラクターは、その王という立場から、本来であれば社会的に共有される男性規範を体現することが期待される。しかしながら、エステル記第一章を名誉という概念に注目して分析すると、アハシュエロスは徹底的に男性規範に沿うことに失敗していることが分かる。このような毀損された男性性は、エステル記において次の 2 つの役割を果たしている。第一に、それはエステル記をマイノリティ文学、とりわけマイノリティにとってのコメディたらしめる重要な要素である。第二に、この毀損された男性性を通じて、エステル記は明言することなくイスラエルの神を暗示することに成功している。

本論考の構成は、以下の通りである。第一節では、エステル記の物語とアハシュエロスのキャラクターを概観する。第二節では、1980 年代以降の男性学の発展、またその研究の成果が聖書解釈にいかに適用されてきたのかを考察する。第三節では、以上の議論を踏まえ、エステル記第一章のアハシュエロスのキャラクターに注目する。

なお、本論考ではマソラ本文のみを分析の中心とし、七十人訳聖書の『エステル記』や旧約聖書外典の『エステル記補遺』は、紙面の制約から扱わない [1]。なお、本論考で引用される聖書のテクストは、すべて新改訳 2017 によった。

第一節　アハシュエロス

エステル記は、ペルシア帝国の首都スサを舞台に展開される。王妃ワシュティは王アハシュエロスの命令を拒否したことから宮廷を追われ、代わりにユダヤ人の孤児エステルが新たな王妃として迎え入れられる。一方で宮廷人であるアガグ人ハマンは、エステルの養父モルデカイとの対立をきっかけにアハシュエロスを唆し、ユダヤ人を根絶するようにとの王令を発する。エステルは、自らの王妃という立場をもってアハシュエロスに働きかけ、この計画を覆すとともに、ハマンを処刑することに成功する。物語は、この出来事を記憶するプリムの伝統を制定することで、幕を閉じる。

エステル記に登場するアハシュエロスは、紀元前 485–465 年にかけてペルシア帝国を統治したクセルクセスを指す [2]。これを踏まえてか、日本語訳聖書においても聖書協会共同訳、新改訳 2017 ともに 「クセルクセス」の表記を採用している。ヘロドトスは、自身の著作『歴史』に気まぐれで専制的、また女性に執着の強いクセルクセスの姿を描いている [3]。これを踏まえれば、エステル記におけるアハシュエロスのキャラクターとヘレニズム期に受容されていたクセルクセスの表象に、大きな齟齬はないものと思われる。しかしながら本論考は、アハシュエロスがクセルクセスという歴史上の人物を背景とすることは前提としながらも、その人物像がエステル記という物語の目的に応じていかなる固有の発展を遂げたのかに注目するため、一貫して「アハシュエロス」の表記を用いることとする [4]。

第二節　男性学と聖書解釈の交差点

本論考で取り扱う男性学 Masculinity Studies は、フロイトの性自認をめぐる研究に端を発するものではあるが、そのものが一つの研究領域として認識されるようになったのは、1980 年代後半のことである [5]。その研究成果の中でも、「複数の男性性 Multiple Masculinities」理論は、男性性という概念を考察する上で中心的な理論的枠組みとなっている [6]。

「複数の男性性」理論は、男性性に複数のあり方を想定するもので、それぞれの男性性はそのものとして存在するのではなく、互いの関係性において互いを定義し合う。その中でも最もよく主題になるのが「覇権的な男性性 Hegemonic Masculinity」である。

それ［「覇権的な男性性」］は、いかに男性であるか［how to be a man］、という社会的規範を表象している。社会において、実際に規範を満たす男性はほとんどいない。しかし、多くの男性は「覇権的な男性性」を具現化できていないにもかかわらず、それを支持しそれによって「共謀的な男性性 Complicit Masculinity」を実現する [7]。

ステファン・M・ウィルソンによれば、「覇権的な男性性」と「共謀的な男性性 Complicit Masculinity」は相互依存的な関係にある [8]。社会で「覇権的な男性性」を満たすことのない数多くの男性たちは、社会的な男性規範を満たす男性たちの構築する家父長制の存続に寄与することで、自身もまたその恩恵を享受する [9]。同様に、覇権的男性はそうした多数の男性たちの承認を受けて、家父長制を維持する。

ヘブライ語聖書の神を理解する上でも、「複数の男性性 Multiple Masculinities」理論は有用といえる。デイヴィッド・J・A・クラインは「本質的な男性性 quintessence of masculinity」という概念を通じて、ヘブライ語聖書の神を理解しようとした [10]。すなわち、ヘブライ語聖書においては、人間の男性性はあくまで神の男性性の写しでしかなく、神のみが「本質的な男性性」を実現しうるというのだ。すなわち、イスラエルの男性たちは常に神という「究極的な覇権的男性 the ultimate hegemonic male」との比較に晒され、不十分な仕方でしか男性規範を満たすことができないという [11]。また、ヘブライ語聖書の多くの男性キャラクターは、神との関係性において「女性化 feminization」あるいは「非男性化 unmanning」される [12]。クライン自身は、この主張を展開する際に、上に紹介した「覇権的な男性性」ないしは「共謀的な男性性」といった用語を用いることはない [13]。しかしながら、覇権的男性の作り出した秩序に参加することによって、他の男性が利益を得るという根本的な構造を共有する以上、本論考ではこれらの用語の適用は適切であると考える。このイスラエルの神との関係性をめぐる人間の男性性の問題は、本論考後半でアハシュエロスのキャラクターを分析する上でも重要な鍵となる。

一方で、クラインは人間男性をめぐる描写に、イスラエルの「覇権的な男性性」を見いだすことも出来ると主張する。彼の ‘David the Man: The Construction of Masculinity in the Hebrew Bible’（1995）は、ヘブライ語聖書における男性性に関してその議論の発展に大きく貢献した論考の一つである。この中でクラインは、サウルの使いによる青年ダビデの描写「ご覧下さい。ベツレヘム人エッサイの息子を見たことがあります。弦を上手に奏でることができ、勇士であり、戦士

の出です。物事の判断ができ、体格も良い人です。主が彼と共におられます。」に注目する[14]。この節に、ヘブライ語聖書における男性としての規範を構成するいくつかの要素が見いだされるという[15]。すなわちそれは身体的強さ、知恵、そして美貌である[16]。これらに加えて、クラインは、女性と距離を置き、男性と行動を共にすることもまた重要であると指摘する[17]。もちろん、20年以上にわたる学術的議論において、クラインの議論には批判も加えられたほか[18]、新たな構成要素の提案も行われた。新たに加えられた項目の中で、とりわけ重要と思われるのは自制心、生殖能力、そして名誉である[19]。ただ、こうした諸概念は緊密に連関し合っており、その区分があくまで形式的なものであることはいうまでもない。

第三節　アハシュエロスの男性性

1. 方法論

前節では男性学において中心的な概念である「複数の男性性」について概観した上で、これらの概念をヘブライ語聖書解釈の領域でいかに応用できるのか、先行研究をひきつつ概観した。本節ではこれをうけ、とりわけ名誉の概念に注目して実際にアハシュエロスというキャラクターを分析したい。

男性性にかかわる名誉は、評判や自尊心とも換言可能なものである。男性は、「武力、経済、言論、そして特に性的な競争を通じて、他人から名誉を奪うことによって」[20]これを獲得する。すなわち名誉をめぐっては、他の男性とのヒエラルキー、つまり上で確認されたような覇権的な男性と従属的な男性という権力関係が不可避的に形成される。また、男性の名誉はその男性に帰属する者（または物)、主にその家族にも反映される。それゆえ、男性自身の名誉を守ることは帰属者の名誉を守ることでもあり、また帰属者が男性の名誉を損なうような行動を起こさないよう彼らを支配することでもある[21]。これによって、男性を頂点とした家父長的な構造が生まれる。男性は帰属者を支配する力を持つ一方で、自らを支配する力、すなわち自制心を問われることにもなる[22]。ヘブライ語聖書に見られる男性性を分析する上で、名誉が重要な概念であることは、前述の論考‘David the Man: The Construction of Masculinity in the Hebrew Bible’の中で、デイヴィッド・クラインも認めるところである[23]。

とりわけ、アハシュエロスの男性性を分析する上で、男性性の構成要件として挙げられた複数の概念のうち、名誉は最も重要な問題であるように思われる。確かに上にも述べたように、男性性を構成する概念を項目化する試みはあくまで暫定的なものであり、実際には相互の概念が不可分に結びついている。しかしながら、アハシュエロスという人物描写を分析する上では、名誉に注目することで、その男性性をより包括的に議論できると考える。というのも、名誉という語は、エステル記の中では 10 回使用される（1;4, 20; 6:3, 6［2 回］, 7, 9［2 回］, 11; 8:16）。名誉 יקר がアハシュエロスにとって非常にとりわけ重要な問題であることは、物語からも明らかであるからだ [24]。ヘブライ語で名誉を意味するיקרは、語根としては、物質の希少さや抽象的概念の貴重さなど、質ではなく量にまつわる価値を意味する [25]。これらの意味が人や物の価値にも発展的に適用されるようになり、重要性、名声または名誉を意味するようになった。

エステル記における名誉の概念に関しては、重要な先行研究がある。リリアン・R・クラインは、‘Honor and Shame in Esther’の中で、「名誉-恥体系 honor and shame codes」に基づいて、エステル記における人物描写を分析する。クラインの論考は、アハシュエロスのキャラクターに特段焦点を定めたものではないが、貴重な考察を提供している。

2. テクスト分析：第一章

アハシュエロスの男性性を理解する上で重要と思われるのは、第一章におけるיקרの使用である。なぜならば、第一章はアハシュエロスすなわちペルシア帝国の王という本来男性性のヒエラルキーの頂点に立つべきキャラクターが、いかに「覇権的な男性性」を満たすことに失敗しているのかを描くことが主題となっているからである。

1:1-6 は、一見アハシュエロスという覇権的男性の名誉を定型的に描写しているようにも見える。エステル記の記述によれば、アハシュエロスは 127 の州からなる巨大な帝国を治めている [26]。上に確認したように、男性は自らの名誉を守るため、彼に従属する者（あるいは物）を支配する必要がある。127 の州の統治は、アハシュエロスの名誉、すなわちその「覇権的な男性性」を強く肯定するものと考えて良いだろう。さらに、アハシュエロスは国内の権力者を招いて 180 日にわたって宴会を開き、「彼の王国の栄光の富と大いなる栄誉（יקר）（1:4）」を示した。

1:7 以降もアハシュエロスによる豪奢な宴会の記述は続くが、彼の「覇権的な男性性」には徐々に疑問符がつき始める。まず、記者は「金の杯で酒がふるまわれたが、その杯は一つ一つ種類が違っていた（1:7)」と述べる。実際、ペルシア帝国の宮殿における宴会で、杯の種類が非常に豊富であったことは、考古学的研究の成果によっても裏付けられている[27]。しかしながら、これに後続する「しかし飲酒は、『強要しないこと』という法に従っていた。だれでもそれぞれ自分の思いのままにさせるようにと、王が宮廷のすべての長に命じていたからである（1:8)」という記述は、一見解釈に難を要する。ここで、再び考古学的研究を参照してみよう。興味深いことに、数ある種類の中でも、宮廷で使用されていたことが認められている、リュトンという杯の特殊な形状（図 1 参照）は、宴会をめぐる特殊なマナーの存在を示唆しているという。すなわち、リュトンは一度酒が注がれると杯を下に置くことが出来ず、また杯下部にある注ぎ口からワインが流れ出てくるため、注がれた分だけをすぐさま飲み干すか、他の杯でもって流れ出る酒を受け止める必要があった[28]。ここで自然と想像される使用法は、より権力のある男性が権威勾配の下に位置する他の男性に対し、酒を注ぎ強要する行為である。実際、ヨセフスは「次々に酒を運んで、むりやり飲ませる」ことを「ペルシア人の慣習」としている（『ユダヤ古代誌』 11.188）[29]。またクセノフォンも、ペルシア帝国の宮殿で行われた宴会には、宴会の主催者が杯に口をつけたときには参加者もそれに倣わなければならないなど、数々の厳しいテーブルマナーが存在したとする（『キュロスの教育』 VIII 8.18）[30]。いずれの記述も歴史学的に十分な実証はされえないものの、「だれでもそれぞれ自分の思いのままにさせる（1:8)」という事態の例外性は明らかであろう。このようなアハシュエロスの宴会のあり方について、リリアン・クラインは次のように述べる。

> アハシュエロス王は、彼ら［招待客］の飲酒にいかなる制限も設けず、それによって、彼らの消費に対する彼の権力を放棄している。彼らは、[...] 好きなだけ飲み、さらには酔うことまでもが、法的に定められている。[...] アハシュエロスは、法的に［宴会の］領域における招待客への彼の権力を放棄する。彼は、「身分の高い者から低い者に至るまでのすべての民」を招き、同じように振る舞わせることで、彼らに対する権力を放棄するのである。［強調は原著者による］[31]

クラインの分析によれば、宴会の参加者の酒を飲む行為を支配することもまた、宴会を主催する男性の名誉には重要な問題である。ここで、そのような支配構造を放棄することを通じ、アハシュエロスは覇権的男性としての役割を果たすことに失敗しているというのだ。

1:9 では、アハシュエロスの妻で王妃のワシュティがはじめて言及され、彼女もまた女性たちのために宴会を催していたことが明らかにされる。クラインは、男性が名誉を保つためには、自らに帰属する女性を公共の空間、とりわけ他の男性の視線から隔離する必要があると述べる[32]。これらに照らせば、アハシュエロスとワシュティの宴会はこの規範に適っているといえよう。しかしながら、ワシュティを自らの宴会へと連れてくるようにとアハシュエロスが宦官に命じたこと（1:10）によって、この秩序は損なわれる[33]。アハシュエロスは、自らの妻を公共の空間で他の男性たちの視線に晒すことによって、妻さらには自分自身の名誉も毀損するのである[34]。さらに問題含みなのは、彼がこの命令を出したときに「ぶどう酒で心が陽気になって（1:10）」いたという点である。酒に酔うという行為は自制心の欠落を意味し、アハシュエロスの権力を揺るがすものである。

以上の事情を踏まえれば、王の命令を拒んだワシュティ（1:12）の動機は明らかであり、彼女は夫と彼女それぞれの名誉を懸念したと考えられる[35]。しかしながら、ワシュティが夫であるアハシュエロスの命令を拒否することによって、アハシュエロスの名誉はいずれにせよ毀損される。というのも、これは彼が自らの従属者を支配することに失敗していることを明らかにするからだ。

1:12 によれば、酒に酔い判断能力を失っているアハシュエロスは、ワシュティの返答に「激しく怒り、その憤りは彼のうちで燃え立った」。この記述もまた、アハシュエロスが自らの情念を支配出来ていないことを明らかにしており、彼の「覇権的な男性性」に疑問符を付すものである。怒りに燃えたアハシュエロスは、自らの側近に以下のように尋ねる。「王妃ワシュティは、宦官によって伝えられたクセルクセス王の命令に従わなかった。法令にしたがって、彼女をどう処分すべきか（1:15）」[36]。王の言葉の直前に付される解説によれば、「法令と裁判に詳しいすべての者に諮るのが、王の慣わしであった（1:13）」。これは、アハシュエロスが、王として法を決定する能力に欠けること、また王としての権力の行使を放棄していることを示しており、宴会の席での酒をめぐる権力の放棄ともパラレルになっているように思われる[37]。また、アハシュエロスは、

名誉を妻によって毀損されたにもかかわらずその回復方法を自分の従属者に尋ねるという、極めて不名誉な立場に自らを追いやっている。

メムカムは、帝国内の他の女性たちがワシュティの行動を伝聞することで、彼女らもまたワシュティと同様に振る舞いはじめる危険性があると指摘する（1:16-8）。その上で彼は、ワシュティに追放令を出すように進言し、「王が出される詔勅がこの大きな王国の隅々まで告げ知らされれば、女たちは、身分の高い者から低い者に至るまでみな、自分の夫を敬うようになるでしょう（1:20）」と述べる。メムカムの言明において「敬う」と訳出された箇所は、直訳すれば「名誉を与える נתן יקר」となる。すなわち、アハシュエロスの命令を拒絶するというワシュティの行為は、アハシュエロスの支配を拒絶することを意味し、これによってワシュティはアハシュエロスの名誉を毀損したのである。アハシュエロスはワシュティを追放することによって、彼女が自身の従属者であることを再び示し、自身の名誉を回復することを目指す。またアハシュエロスは公的な場でワシュティに拒絶され名誉を毀損されたのであるから、その回復もまた公的になされなければならない。果たして、ワシュティの追放令はすべての州に送り出されるのである。

3. 物語の中でアハシュエロスの果たす役割

ここまで、名誉とその関連する概念に注目してエステル記の第一章のアハシュエロスをめぐる記述を分析してきた。その結果、アハシュエロスのキャラクターは、王という「覇権的な男性性」の実現が最も強く期待される立場にもかかわらず、その規範を満たすことに徹底的に失敗していることが明らかにされた。では、このような毀損された男性性は、物語の中でどのような役割を果たすのだろうか。

第一に、アハシュエロスが覇権的男性としての規範から逸脱し続ける姿は、エステル記がコメディとして機能する上で、非常に重要な役割を果たしている。エステル記がコメディとしての性格を持つことは、すでに多くの先行研究において指摘されている[38]。キャサリン・M・オコナーは、エステル記のコメディ的特徴を皮肉、誇張、報復の三つの要素に分けた上で、次のように述べる。

> 皮肉とは、登場人物や読者が何かを期待したり考えたりするものの、正反対のことが起こり、その矛盾を発見するところにユーモアが生まれる場合を指す[39]。

エステル記は、典型的な帝国の王について語るかのような仕方で始まる。広大な領土を持ち、豪奢な宴会を開いて、国中の権力者を招待する。ここで読者は一度、アハシュエロスを強力なリーダーシップを発揮する王であると予想するだろう。しかしながら、上の分析で示されたように、アハシュエロスは覇権的男性として、周囲のみならず自分自身すらも統制する能力に欠けるほか、名誉を実現するための権力を自ら積極的に放棄するような行動にでる。この矛盾が、読者にはたまらなく滑稽に映るのだ。アレクサンダー・グリーンは、大多数のユダヤ人によって、エステル記がいかに消費されたのかを以下のように推測する。

> コメディの創作とは、他の方法ではそのような立場に立つことができない大多数の人々がある種の自由を達成し、支配者や敵の弱さをあざ笑うことで、優越感を得ることを可能にする手段である[40]。

エステル記の物語は、一つの矛盾した構造をはらむ。すなわち物語は一方で、ディアスポラ・ユダヤ人の置かれた不安定な政治的状況や彼らの持つ集団的暴力に対する危機感を忠実に反映している。しかしながら他方で、物語で提示される解決方法は、こうした現実的な迫害の可能性に対してあまりに非現実的に思われる。というのも、多くのディアスポラ・ユダヤ人はモルデカイやエステルのような帝国権力へのアクセスは有していなかったと推測されるからだ[41]。もし彼らがエステル記の登場人物であったとすれば、ただ王令により殺されることを待つしかなかっただろう。こうした帝国権力とは隔絶された生活を送っていた市井のディアスポラ・ユダヤ人にとっての物語の眼目は、自分たちが現実世界では到底対抗することのできない帝国の権力者層を、アハシュエロスという愚かなキャラクターとして描き、笑いに転化することにあった。オコナーの述べるように、「それ［エステル記におけるユーモア］は政治的な武器であり、生き残るための行為であり、ペルシア帝国、その王、役人、法、被支配者との関係に対する痛烈な批判」であり、エステル記はその意味でディアスポラ・ユダヤ人によるマイノリティ文学と言えよう[42]。

第二に、アハシュエロスの毀損された男性性は、イスラエルの神を暗示している。エステル記では、その中でテトラグラマトンが一切見られないことから、その執筆を担った人物の神学

観はしばしば議論の的となっている[43]。エステル記記者は神の歴史的な介入などはなから信じない世俗的な人物であったのか、あるいは神の名にはふれないものの、物語の端々に神の介在が暗示されているのか。この問題を検討する上では、デイヴィッド・クラインによる「本質的な男性性 quintessence of masculinity」の概念を導入するのが有用である。上ですでに確認されたように、イスラエルの男性たちは神という絶対的な男性性と常に比較関係にあり、それゆえに常に「共謀的な男性性」しか実現することが出来ない。エステル記記者は、ペルシア帝国の頂点に位置するアハシュエロスをあえて、「覇権的な男性性」を実現し得ない人物として描くことによって、暗に彼よりも高次に位置する覇権的男性、すなわちイスラエルの神を暗示しているのではないか。この論点は、既出のマイノリティ文学としてのエステル記理解に回収されると考えられる。すなわち、マイノリティの立場にあったディアスポラ・ユダヤ人が、自らの神をペルシア帝国の王と公に比較することに抵抗を覚え、より消極的ではあるが、同胞には伝わる仕方で表現することを試みたのではないだろうか[44]。

結び

本論考の目的は、領域横断的な観点に立った新たな聖書解釈の可能性を探ることにあった。実際に、男性学の研究成果を利用してエステル記第一章を分析すると、アハシュエロスというキャラクターの中に矛盾が明らかになった。つまり、アハシュエロスはペルシア帝国の王であり、本来は社会的な男性規範に適うべき人物である。しかしながら分析によれば、彼は周囲も自分自身も支配することの出来ない惰弱な人間として描かれていることが明らかにされた。そして重要なことに、このキャラクターに見られる欠陥こそが、マイノリティ文学としてのエステル記の中で重要な役割を果たしている。

今後の展望、課題としては、アハシュエロスの男性性、またそのイスラエルの神との関係性をより高い精度で分析することにある。そのためには、アハシュエロス、あるいはエステル記第一章といった狭い範囲の分析では不十分であり、エステルやモルデカイといったユダヤ人のキャラクターの描写を、エステル記全体にわたって男性学の観点から見る必要があるだろう。

付録：図 1

セラミックのリュトン（紀元前 5－4 世紀頃）[45]。

参考文献

【資料関連文献】

ヨセフス『ユダヤ古代誌』第 3 巻（秦剛平訳、筑摩書房、2018 年）。

【二次文献】

Colburn, Henry P. “Social Practices: Drinking Like a Persian”. In *Archaeology of Empire in Achaemenid Egypt*, 189–220. Edinburgh, Edinburgh University Press, 2022.

Creangă, Ovidiu. “Introduction”. In *Hebrew Masculinities Anew*, edited by Ovidiu Creangă, 1–16. Hebrew Bible Monographs ; 79. Sheffield, Sheffield Phoenix Press, 2019.

Fox, Michael V. *Character and Ideology in the Book of Esther*. Studies on Personalities of the Old Testament. Columbia, S.C, University of South Carolina Press, 1991.

Green, Alexander. “Power, Deception, and Comedy: The Politics of Exile in the Book of Esther”. *Jewish Political Studies Review* 23, no. 1/2, 2011, pp. 61–78.

Gruen, Erich S. ‘Persia Through the Jewish Looking-Glass’. In *The Construct of Identity in Hellenistic Judaism : Essays on Early Jewish Literature and History*, pp. 229–44. Deuterocanonical and Cognate Literature Studies 29. Berlin, De Gruyter, 2016.

Halvorson-Taylor, Martien A. “Secrets and Lies: Secrecy Notices (Esther 2:10, 20) and Diasporic Identity in the Book of Esther”. *Journal of Biblical Literature* 131, no. 3, 2012, pp. 467–85.

Klein, Lillian R. “Honor and Shame in Esther”. In *A Feminist Companion to Esther, Judith and Susanna*, edited by Athalya Brenner-Idan, pp. 149–75. The Feminist Companion to the Bible ; 7. Sheffield, Sheffield Academic Press, 1995.

Melton, Brittany N., and David G. Firth, eds. *Reading Esther Intertextually*. Library of Hebrew Bible/Old Testament Studies ; 725. London, T&T Clark, 2022.

Mosis, R. ‘כאב’. In *Theological Dictionary of the Old Testament*, edited by G. Johannes Botterweck, Helmer Ringgren, and Heinz-Josef Fabry, translated by David E. Green, 10. Grand Rapids, MI; Cambridge, U.K., Eerdmans, 1995.

Niditch, Susan. “Esther: Folklore, Wisdom, Feminism and Authority”. In *A Feminist Companion to Esther, Judith and Susanna*, edited by Athalya Brenner-Idan, pp. 26–46. The Feminist Companion to the Bible ; 7. Sheffield, Sheffield Academic Press, 1995.

Nissinen, Martti. “Relative Masculinities in the Hebrew Bible/Old Testament”. In *Being a Man: Negotiating Ancient Constructs of Masculinity*, edited by Ilona Zsolnay, pp. 221–47. Studies in the History of the Ancient Near East. London, Routledge, 2016.

North, Robert. “Palestine, Administration of: Postexilic Judean Officials”. In *The Anchor Yale Bible Dictionary*, edited by David Noel Freedman, 87. New York, Doubleday, 1992.

O’Connor, Kathleen M. “Humour, Turnabouts and Survival in the Book of Esther”. In *Are We Amused? : Humour about Women in the Biblical Worlds*, edited by Athalya. Brenner-Idan, pp. 55–64. Journal for the Study of the Old Testament. Supplement Series ; 383. London, T & T Clark International, 2003.

Radday, Yuhuda T. “Esther with Humor”. In *On Humour and the Comic in the Hebrew Bible*, edited by Athalya Brenner-Idan and Yehuda T Radday, Vol. 23. Bible and Literature Series. London, Bloomsbury Publishing Plc, 1990.

Wagner, Siegfried. ‘יקר’. In *Theological Dictionary of the Old Testament*, edited by G. Johannes Botterweck and Helmer Ringgren, translated by David E. Green. Grand Rapids, MI; Cambridge, U.K., Eerdmans, 1990.

White, S. A. “Esther: A Feminine Model for Jewish Diaspora”. In *Gender and Difference in Ancient Israel*, edited by Peggy Lynne Day, pp. 161–77. Minneapolis, Fortress, 1989.

Wilson, Stephen M. “Biblical Masculinity Studies and Multiple Masculinities Theory: Past, Present, and Future” In *Hebrew Masculinities Anew*, edited by Ovidiu Creangă, pp. 19–40. Hebrew Bible Monographs ; 79. Sheffield, Sheffield Phoenix Press, 2019.

Yamauchi, Edwin M. ‘Ahasuerus (Person)’. In *The Anchor Yale Bible Dictionary*, edited by David Noel Freedman. New York, Doubleday, 1992.

注

[1] 七十人訳聖書の『エステル記』や旧約聖書外典の『エステル記補遺』に関し、近年のまとまった研究としては、Brittany N. Melton and David G. Firth, eds., *Reading Esther Intertextually*, Library of Hebrew Bible/Old Testament Studies ; 725, London: T&T Clark, 2022.

[2] Edwin M. Yamauchi, 'Ahasuerus (Person)', in *The Anchor Yale Bible Dictionary*, ed. David Noel Freedman, New York, Doubleday, 1992; Michael V. Fox, *Character and Ideology in the Book of Esther*, Studies on Personalities of the Old Testament, Columbia, S.C: University of South Carolina Press, 1991, pp. 14–15; Erich S Gruen, 'Persia Through the Jewish Looking-Glass', vol. 29, Berlin, Boston, De Gruyter, 2020, pp. 229–44.

[3] Yamauchi, 'Ahasuerus (Person)'; Fox, *Character and Ideology in the Book of Esther*, p. 15.

[4] Alexander Green, "Power, Deception, and Comedy: The Politics of Exile in the Book of Esther", *Jewish Political Studies Review* 23, no. 1/2, 2011, p. 62.; Fox, *Character and Ideology in the Book of Esther*, p. 15. また、歴史的背景のみに注目して、אחשורוש を「クセルクセス」とすると、アハシュエロスという名前に施されたエステル記記者の嘲笑の意図を見過ごしてしまう危険性もある。アハシュエロス אחשורוש というヘブライ語名は、頭痛を意味する *kᵉʾēḇ rōʾš*（シラ記 31:29）と韻を踏んでおり、「頭痛王」というあだ名のようにも捉えられる（Green, 72; Yuhuda T Radday, "Esther with Humor", in *On Humour and the Comic in the Hebrew Bible*, ed. Athalya Brenner-Idan and Yehuda T Radday, vol. 23, Bible and Literature Series, London, Bloomsbury Publishing Plc, 1990, p. 296.）。興味深いことに、シラ記では、*kᵉʾēḇ rōʾš* は過剰な飲酒によってもたらされる頭痛、あるいは更に踏み込んで、過剰な飲酒による精神の苦しみに言及するために用いられている（R Mosis, 'כאב', in *Theological Dictionary of the Old Testament*, ed. G. Johannes Botterweck, Helmer Ringgren, and Heinz-Josef Fabry, trans. David E. Green, Grand Rapids, MI; Cambridge, U.K., Eerdmans, 1995, p. 10.）。無論、シラ記の成立はエステル記より 2－3 世紀ほど後であり、これには慎重な検討を要するが、もしもシラ記に見られる用例が、エステル記記者の時代にも一般的であったと仮定すれば、更なる考察が可能となるのではないだろうか。すなわち、エステル記に多く見られる酒とアハシュエロスをめぐる描写を踏まえれば、「頭痛王」というあだ名には、過度な飲酒によって、常に頭痛や精神の苦痛を抱える愚かな人物として、王を揶揄する意図も込められているのかもしれない。

[5] Stephen M. Wilson, “Biblical Masculinity Studies and Multiple Masculinities Theory: Past, Present, and Future”, in *Hebrew Masculinities Anew*, ed. Ovidiu Creangă, Hebrew Bible Monographs ; 79, Sheffield, Sheffield Phoenix Press, 2019, p. 20.

[6] Wilson, p. 20.

[7] Wilson, pp. 20–21.

[8] Wilson, p. 21.

[9] Wilson, p. 21. その他にも「従属的な男性性 subordinate masculinity」や「周縁的な男性性 marginal masculinity」といったカテゴリーも提唱されている。

[10] Ovidiu Creangă, “Introduction”, in *Hebrew Masculinities Anew*, ed. Ovidiu Creangă, Hebrew Bible Monographs ; 79, Sheffield, Sheffield Phoenix Press, 2019, p. 5.

[11] Wilson, ‘Biblical Masculinity Studies and Multiple Masculinities Theory: Past, Present, and Future’, p. 30.

[12] Wilson, p. 31.

[13] Wilson, p. 24.

[14] Wilson, p. 23.

[15] Wilson, p. 23.

[16] 本論考では紙面の制約から議論の範囲外としたが、これらの類型もまた、アハシュエロスの描写分析において、重要な観点である。アハシュエロスが、王でありながら、その身体性についての記述が欠落していることは、エステルやワシュティといった女性のキャラクターの外見に対しての明確な言及（1:11; 2:7）と対照的である。

[17] Wilson, “Biblical Masculinity Studies and Multiple Masculinities Theory: Past, Present, and Future”, p. 24.

[18] Wilson, pp. 23–29.

[19] Wilson, pp. 26–28.

[20] Wilson, p. 27.

[21] Wilson, p. 28.

[22] 男性学的観点からの聖書解釈が紹介された当初、自制心は、ギリシア・ローマ世界やラビユダヤ教においては、広く規範的な男性像として共有されていたものの、ヘブライ語聖書に描かれるイスラエルの男性たちに関してはこの限りではないと考えられていた。しかし、マーク・K・ジョージによる論考 “Masculinity and its Regimentation in Deuteronomy”（2010）の出版以降、その認識は大きく塗り替えられることとなった。詳しくは、Wilson, “Biblical Masculinity Studies and Multiple Masculinities Theory: Past, Present, and Future”, pp. 26–27 を参照。

[23] Wilson, p. 27.

[24] Fox, *Character and Ideology in the Book of Esther*, p. 172; Green, ‘Power, Deception, and Comedy: The Politics of Exile in the Book of Esther’, pp. 63, 72; Lillian R. Klein, “Honor and Shame in Esther”, in *A Feminist Companion to Esther, Judith and Susanna*, ed. Athalya Brenner-Idan, The Feminist Companion to the Bible ; 7, Sheffield, Sheffield Academic Press, 1995, p. 153.

[25] Siegfried Wagner, ‘יקר’, in *Theological Dictionary of the Old Testament*, ed. G. Johannes Botterweck and Helmer Ringgren, trans. David E. Green, Grand Rapids, MI; Cambridge, U.K., Eerdmans, 1990, p. 280.

[26] 実際のペルシア帝国における州の数は、20 から 30 程度と考えられる。しかしながら、ダニエル書 6:2 も、ペルシア帝国には 120 の州があったと証言している。このことから、ペルシア帝国崩壊後、歴史的記憶が薄れる中で、州の数が多く記録されるようになったと考えられる。（Fox, *Character and Ideology in the Book of Esther*, p. 15.）

[27] Henry P Colburn, “Social Practices: Drinking Like a Persian”, in *Archaeology of Empire in Achaemenid Egypt*, Edinburgh, Edinburgh University Press, 2022, p. 193.

[28] Colburn, p. 198.トルコ南部クサントスで見つかったレリーフには、リュトンから流れ出る酒を、浅い杯で受け止める人物が描かれている。

[29] Fox, *Character and Ideology in the Book of Esther*, p. 17. 邦訳は、ヨセフス『ユダヤ古代誌』第 3 巻（秦剛平訳、筑摩書房、2018 年）による。

[30] Fox, p. 17. Colburn もまた、宴会の中で、各種の杯を持つ仕方まで、詳しく規定されていたとする。Colburn, ‘Social Practices: Drinking Like a Persian’, p. 197.

[31] Klein, ‘Honor and Shame in Esther’, p. 154.

[32] Klein, p. 151.

[33] 宦官は、ペルシア帝国の宮廷で、しばしば高官としての立場を獲得した（Robert North, “Palestine, Administration of: Postexilic Judean Officials”, in *The Anchor Yale Bible Dictionary*, ed. David Noel Freedman, New York, Doubleday, 1992, p. 87.）。宦官の男性性に関しては、以下の論考を参照。Martti Nissinen, “Relative Masculinities in the Hebrew Bible/Old Testament”, in *Being a Man: Negotiating Ancient Constructs of Masculinity*, ed. Ilona Zsolnay, Studies in the History of the Ancient Near East, London, Routledge, 2016, pp. 221–47.

[34] すでに確認されたように、デイヴィッド・クラインによるイスラエルの「覇権的な男性性」の構成要件によれば、男性は女性と距離をとり、常にホモソーシャルな空間に身を置くことが、男性性を実現する上で重要であるという。その観点からすれば、女性をホモソーシャルな空間に呼び入れるという行為もまた、男性性の毀損につながる。

[35] Fox, *Character and Ideology in the Book of Esther*, p. 20.

[36] クラインが指摘するように、ワシュティを自らの宴会に連れてくるようにという命令は、アハシュエロスが他者に相談することなく、自律的に決定を下した唯一の事例である（Klein, “Honor and Shame in Esther”, p. 155, 注 2）。

[37] すでに多くの註解者が指摘するように、アハシュエロスのキャラクターの最大の特徴は、王という立場にありながら、自律的にはいかなる決定を下すことも出来ず、それゆえに常に周囲の人物にその権力を利用されていることにある。Green, “Power, Deception, and Comedy: The Politics of Exile in the Book of Esther”, pp. 63–64; Susan Niditch, “Esther: Folklore, Wisdom, Feminism and Authority”, in *A Feminist Companion to Esther, Judith and Susanna*, ed. Athalya Brenner-Idan, The Feminist Companion to the Bible ; 7, Sheffield, Sheffield Academic Press, 1995, p. 34; Kathleen M. O’Connor, “Humour, Turnabouts and Survival in the Book of Esther”, in *Are We Amused? : Humour about Women in the Biblical Worlds*, ed. Athalya. Brenner-Idan, Journal for the Study of the Old Testament. Supplement Series ; 383, London: T & T Clark International, 2003, pp. 59–60; Klein, “Honor and Shame in Esther”, p. 155; Fox, *Character and Ideology in the Book of Esther*, p. 173. また、このような王の自律性の欠落が、物語の進行の上では常に重要な役割を果たしている。さらに、エステル記の編集

史に目を向けるならば、この王の自律性はエステル記の成立過程を探る上での判断材料となり得る。第 7 章に至るまで家来たちやエステルの助言なしには何も決定することのできなかった王の受動性は、突然影を潜め政治的主導力を発揮する。デイヴィッド・クラインは、このキャラクターの非一貫性を、第 8 章以降を編集した後代の記者に帰する。詳しい議論は、David J. A. Clines, *The Esther Scroll : The Story of the Story*, Journal for the Study of the Old Testament Supplement Series ; 30, Sheffield: JSOT, 1984, pp. 47–48 を参照。本論考では、エステル記の基本的なかたちは紀元前 400 年頃、ペルシア帝国下に確立し、ハスモン朝成立以降に、マカバイ戦争などの影響を受けて、第 8 章以降が編集・追加されたされたものと考える。紙面の制約から、ここでは参考文献を掲載するにとどめる。Jean-Daniel Macchi, "Denial, Deception, or Force: How to Deal With Powerful Others in the Book of Esther", in *Imagining the Other and Constructing Israelite Identity in the Early Second Temple Period*, ed. Ehud Ben Zvi and Diana Vikander Edelman, Library of Hebrew Bible / Old Testament Studies ; 456, London, Bloomsbury T&T Clark, 2014, p. 228; Jill Middlemas, "Dating Esther: Historicity and the Provenance of Masoretic Esther", in *On Dating Biblical Texts to the Persian Period : Discerning Criteria and Establishing Epochs*, ed. Richard J. Bautch and Mark Lackowski, Forschungen Zum Alten Testament. 2. Reihe, 101, Tübingen, Mohr Siebeck, 2019, pp. 149–68; Helge Bezold, "Violence and Empire: Hasmonean Perspectives on Imperial Power and Collective Violence in the Book of Esther", *Hebrew Bible and Ancient Israel* 10, no. 1, 2021, pp. 45–62.

[38] Green, "Power, Deception, and Comedy: The Politics of Exile in the Book of Esther"; O'Connor, "Humour, Turnabouts and Survival in the Book of Esther"; Radday, "Esther with Humor"; Niditch, "Esther: Folklore, Wisdom, Feminism and Authority".

[39] Kathleen M. O'Connor, "Humour, Turnabouts and Survival in the Book of Esther", in *Are We Amused? : Humour about Women in the Biblical Worlds*, ed. Athalya. Brenner-Idan, Journal for the Study of the Old Testament. Supplement Series ; 383, London, T & T Clark International, 2003, p. 53.

[40] Alexander Green, "Power, Deception, and Comedy: The Politics of Exile in the Book of Esther", *Jewish Political Studies Review* 23, no. 1/2, 2011, p. 62.

[41] Green, p. 72; Radday, "Esther with Humor", p. 296.

[42] O'Connor, "Humour, Turnabouts and Survival in the Book of Esther", p. 62.

[43] Michael V. Fox, *Character and Ideology in the Book of Esther*, Studies on Personalities of the Old Testament, Columbia, S.C, University of South Carolina Press, 1991, pp. 235–37; Green, "Power, Deception, and Comedy: The Politics of Exile in the Book of Esther", pp. 72–4; S. A. White, "Esther: A

Feminine Model for Jewish Diaspora", in *Gender and Difference in Ancient Israel*, ed. Peggy Lynne Day, Minneapolis, Fortress, 1989, p. 166.

[44] ディアスポラ・ユダヤ人のユダヤ人としてのアイデンティティについて、「エステルは自分の民族も、自分の生まれも明かさなかった。モルデカイが、明かしてはいけないと彼女に命じておいたからである（2:10）」という一節に注目して考察している。Martien A. Halvorson-Taylor, "Secrets and Lies: Secrecy Notices (Esther 2:10, 20) and Diasporic Identity in the Book of Esther", *Journal of Biblical Literature* 131, no. 3, 2012, pp. 467–85.

[45] Colburn, "Social Practices: Drinking Like a Persian", p. 209